

7. 地域材の流通に関する調査研究

(2) 多摩木材センターと取引のある製材所のアンケート調査

鳥海晴夫・桶川秀実

〔目的〕

「住宅の品質確保等に関する法律」(以下「品確法」が2000年4月に施行され、木材のニーズ(品質、性能等)が大きく変化してきたといわれている。そこで、大工・工務店・建主など消費者に直結している製材所を対象にアンケート調査を実施し、いま消費者が求めている木材ニーズを把握し、施業方法及び木材流通改善のための基礎資料とする。

〔方法〕

多摩木材センターのセリに参加し、比較的取扱量の多い多摩地区の製材業18社を対象にアンケート調査を実施した。回答は12社(回収率67%)からいただいたが、多摩木材センター協同組合や秋川木材協同組合の役員をしている人が多く、多摩地域の製材業者の意向調査ができたと考えている。

〔結果〕

1. 木材の産地

今回、回答いただいた製材所の木材の産地は、「多摩産材」が47%、「他県産材」が24%、「外材」が29%であった。ただし、多摩産材か他県産材か見分けるのはかなり難しく、多摩木材センターに入荷している「国産材」の約5割が「多摩産材」の推定されることから、「他県産材」を「多摩産材」と見ている可能性がある。「外材」は、商社から直接電話による売り込みや、付売問屋がトラック1台ごと売りにくる場合もあるということで、製材する木材の約3割は外材である(図-1)。

2. 仕入れ先

「多摩産材」は、多摩木材センターで8割を仕入れている。11%は、開発がらみで伐採されたもので建設または造園会社等から直接持ち込まれている。素材生産業者や森林所有者から直接仕入れるのは4%ずつと少ない(図-2)。

「他県産材」は、77%が多摩木材センターから仕入れている。他県木材市場からも16%仕入れているが、ほとんどが埼玉県飯能市からで、一部は山梨県から仕入れている(図-3)。

3. 製材品部材割合

構造材等(柱、間柱、垂木、根太等)が72%、造作材(平板、野地板等)が28%であった(図-4)。(財)日本住宅・木材技術センターが実施した木造軸組工法住宅における木材使用量調査によると、構造材等の割合が1993年は87%、2001年は83%であり、多摩地域は10%ほど構造材等に換く割合が低かった。このことは、板類など造作材としての利用が他地域より多く、注目される。

4. 製材品販売先

(1) 業態別製材品販売先

大工・工務店が6割を越え、木材販売業者が2割、製品市場が1割となっている(図-5)。製材品は大工・工務店を中心に流通されており、消費者(住宅の施主)までの流通経路が短いのが特徴である。

(2) 地域別製材品販売先

「西多摩」が6割、「区内」と「都外」を合わせると3割であった(図-6)。大半が地元で消費し

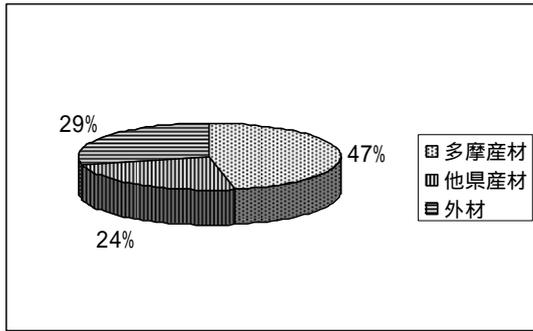


図 - 1 木材の産地

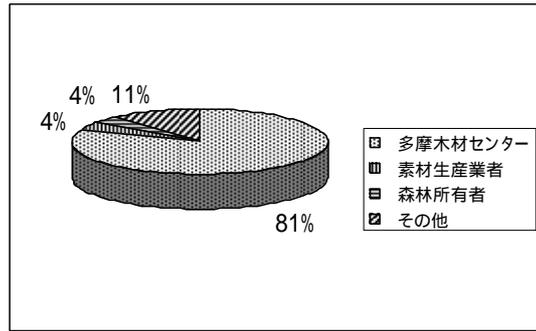


図 - 2 多摩産材の仕入れ先

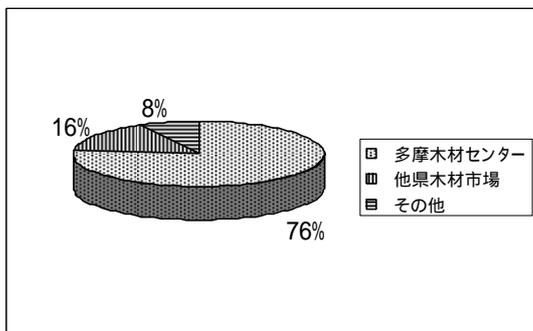


図 - 3 他県産材の仕入れ先

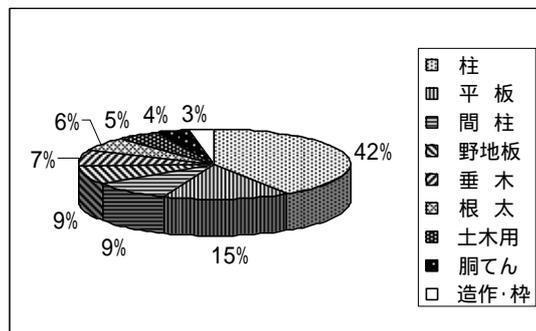


図 - 4 製材品部材割合

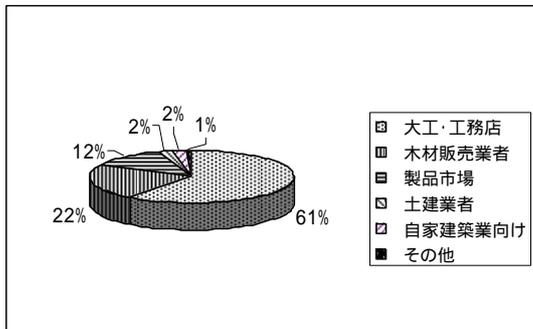


図 - 5 業態別製品販売先

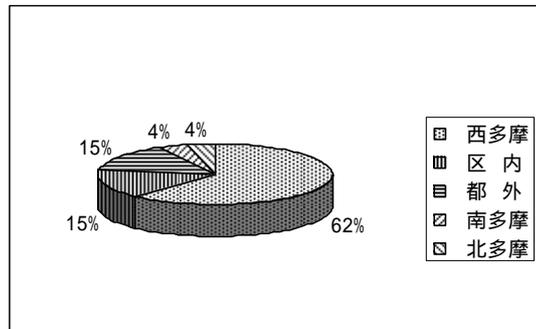


図 - 6 地域別製品販売先

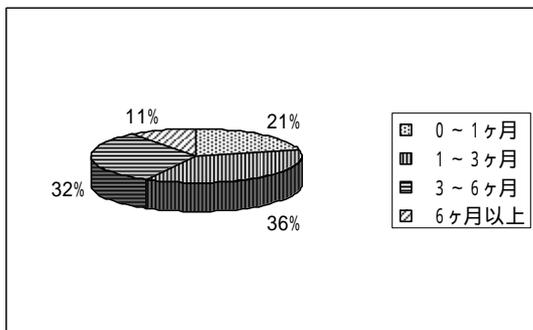


図 - 7 乾燥期間(天然乾燥)

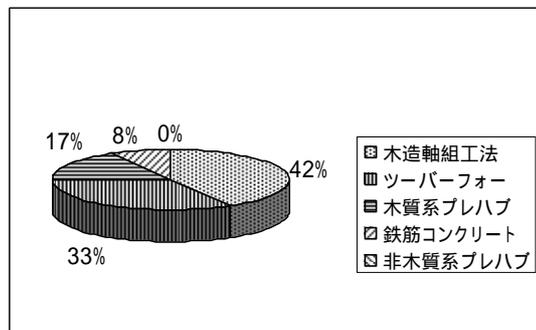


図 - 8 木材ニーズの変化 建築工法

ている。

5. 乾燥方法

人工乾燥は、蒸気式と電気式がそれぞれ1件の合計2件であった。あとの10件は天然乾燥で、乾燥期間は、1～3ヶ月が37%、3～6月が32%であった(図 - 7)。

6. 木材ニーズの変化

「品確法」施行後、どのようなニーズに変わってきたか、聞いてみた。

(1) 建築工法

「木造軸組工法」が多くなったと答えた人は42%、「ツ - バイフォー」と答えた人が33%であり、在来工法へのこだわりは続いていくものと思われる(図 - 8)。

(2) 木材へのこだわり

「国産材」にこだわるが38%、「多摩産材」にこだわるが31%で合わせると7割弱が国産の材にこだわりをみせている(図 - 9)。

(3) 節の価値観

節について、「節をあまり気にしない」が62%、「節のあるところとないところを区別するようになった」が23%で、節の有無を気にする人が少なくなったことが注目される(図 - 10)。

(4) 木材の美観

節のある「並材」を求める人が78%、「関心がない」の11%を合わせると、9割弱の人は節があってもいいと判断しており、死節でないかぎり消費者は節を好んでいるようである(図 - 11)。

(5) 木材の強度

「強度のある集成材にこだわる人が増えた」が25%にとどまり、「無垢材にこだわる人が多い」が63%であった(図 - 12)。強度より、シックハウス対策から無垢材を求める人が多くなったと思われる。

(6) 木材の乾燥

「狂いのない乾燥材を求めるようになった」が9割に達しており、多摩産材の銘柄化のためには木材乾燥が大きな課題である(図 - 13)。

7. 製材業を続けていくための課題

「材価の低迷」が29%、「販売問題」が25%、「資金問題」が17%であり、合わせると7割の人が経済面の不安を感じている(図 - 14)。製材所の台所事情は、不況による建築着工件数の減少で木材需要が落ち込み、製品価格や販売に影響し、資金繰りが苦しくなっているものと推定される。

8. 製材所の将来対策

「製材品保管場所の設置」が38%、「生産システムの自動化」・「乾燥機の設置」・「品質・性能の明確化」がそれぞれ15%、「木材見積の自動化」が8%であり、合わせると9割以上の人が前向きに対策を考えており、転廃業を考えている人は1人だけであった(図 - 15)。多摩産材の利用拡大を図るには、行政からのアプローチが期待される。

9. 多摩産材の印象

多摩産材の印象について、色彩は75%の人が「普通」、年輪幅は「普通」または「密」が77%、節の数は7割の人が「普通」、狂いは75%の人が「普通」、黒芯の多さは7割の人が「普通」と答えており、地元の製材業者から多摩産材に対して好意的に評価されている。しかし、木材価格は「普通」が73%であるが、木材の乾燥状態は7割の人が「生」、多摩産材の供給量は「不安定である」が45%であり、木材乾燥と安定供給が大きな課題である。

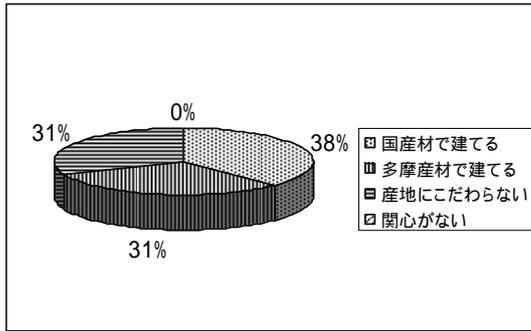


図 - 9 木材へのこだわり

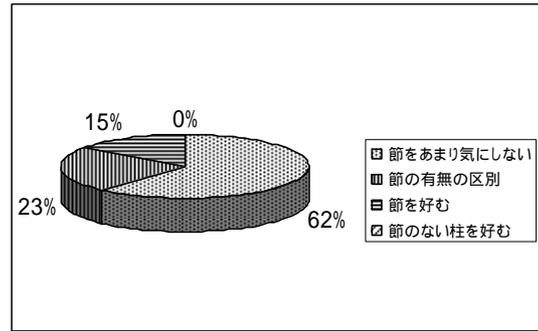


図 - 10 節の価値観

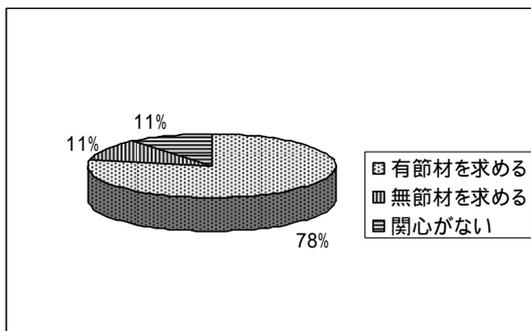


図 - 11 木材の美観

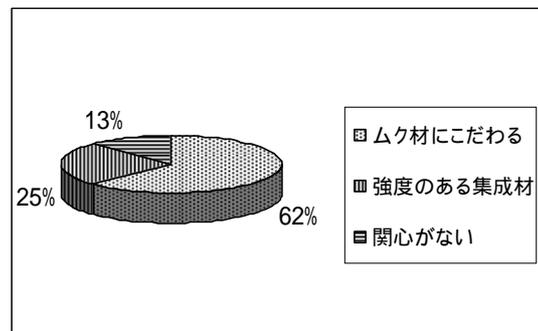


図 - 12 木材の強度

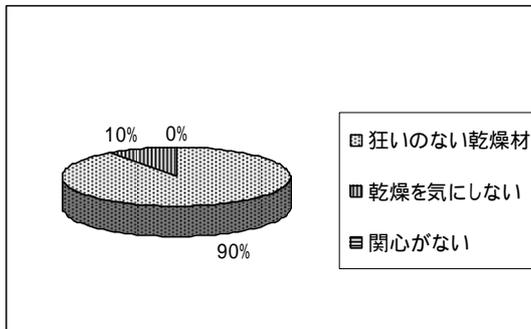


図 - 13 木材の乾燥

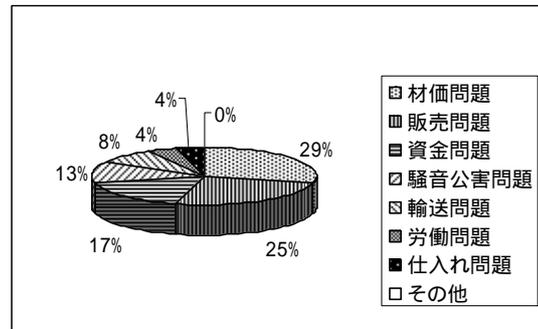


図 - 14 製材業を続けていくための課題

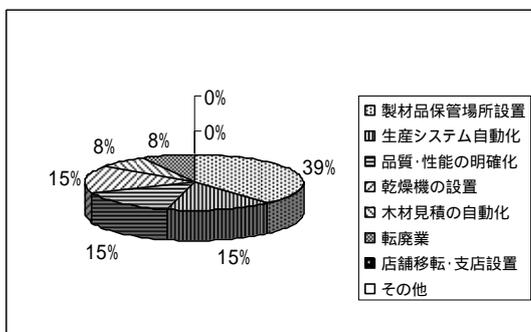


図 - 15 製材所の将来対策